

縄文から弥生へ —習俗から見た—

春 成 秀 爾*

こんにちは・「縄文から弥生へ」—習俗から見た—と題して、これからお話しさせていただきます。昨日、今日の遺跡調査発表会を皆さん聞かれて、縄文時代・弥生時代という二つの時代についてのイメージはだいたいつかんでいただけたかと思います。私は縄文時代から弥生時代へ移行する時に、何がどう変わったのかという点を、主として、当時の風習・民俗の面から探っていくことにします。

私は、もともと西日本の人間ですので、今日も基本的に西日本のお話しになります。弥生文化が発達したのはまず西日本でありますから、西日本で縄文から弥生へ移行する時にどう変わったかということをきちんとつかんだ上で、東日本での縄文から弥生への移行を見ていけば、東西のちがいが非常にはっきりできて、理解もしやすいのではないかと考えています。

稲作 縄文時代から弥生時代への移行は、これまで何を基準にして考えてきたのかといいますと、稲作です。稲を作り、米を食べるという生活が弥生時代に始まったということで、稲作の始まり、中でも水田稲作を基準にしまして、それが始まる前と始まってからということで縄文と弥生の境目を考えていたんですね。ところがこの数年の間に稲作の起源が、どんどん溯っていくようになりました。

東北地方でも、今から4,000年近くまで溯る縄文時代後期に米を作っていたんじゃないかという証拠ができました。それから西日本では、最初は縄文時代後期、約三千数百年前まで溯るという痕跡、例えば粃の跡が付いた土器のかけらが発掘された。土器は明らかに縄文後期のもの、そうするとどうしても米の存在を考えざるを得ない。そうこうしているうちに、土器のかけらをつぶして調べてみると、その中に稲の細胞の化石を含んでいることがわかりました。それが縄文時代中期です。そこで最近では稲作の始まりは、縄文時代の中頃まで溯るということが言われ始めています。ただ、これまで見つかっている縄文時代の稲作の痕跡は、土器の底に粃の跡がついているとか、青森県の例は粃そのものが出ている、あるいは岡山県の縄文中期の例では土器の中に稲の細胞の化石が入っているというものです。それ以外の証拠が実は挙がっていない。弥生時代に米を作っていた証拠としては、粃の圧痕とか稲の粃以外に水田そのものが見つかっているんですね。それから、水田を耕すには鍬や鋤が必要ですし、収穫するための穂摘具も要りますが、そういう道具類も見つかっています。ですから水田稲作を行っていたという証拠はいくらでも挙げることができます。それに対して縄文時代の場合は粃の痕跡だけが見つかっています。どういう道具を使って、どういう場所に稲を栽培していたかということはまだわかっていません。そこで、私共の博物館の佐原真さんは、そういう証拠がいくら挙がったところで日本でお米を作っていた証拠にはならないといっています。

例えば、当時すでに朝鮮半島では米を作っています。あるいは中国大陆でも米を作っています。そういう所から米を運んで来たのではないことをどのようにして証明するのか。他所で作って製品だけを運んで来ることはできるわけです。そういう点で縄文時代の稲作というのは、まだまだ証拠が不足しているといわざる

* 国立歴史民俗博物館教授

を得ません。ただ、将来は、稲を作っていたその場所が見つかるとか、農具が見つかる、という時期がやって来るかも知れません。そうしますと、縄文時代にも確かに米を作っていたということになります。では、縄文時代に稲作を行っていたとして、それによって世の中がどれだけ変わったのかと言いますと、今のところはっきり指摘できません。稲作文化という捉え方が縄文文化ではできません。それに対して、水田稲作をしていることを基準にして考えてきた弥生時代の文化を見ると、明らかに稲作を中心とした文化・社会を作っています。そして風習も持っております。その風習について、これから私はお話ししたいと思います。

西日本では弥生時代が始まるのは紀元前4、5世紀のことです。だいたい紀元前400年前後に九州を中心にして本格的な水田稲作が始まる、そして新しい文化が始まる、と理解しています。弥生時代の風習を見ていく場合の一つの見方は、こういうことです。縄文時代と弥生時代とを比較する場合、縄文時代の文化伝統を引き継いだものが弥生時代にあります。それから、例えば稲作文化は、これまでの見解では日本列島で独自に生まれたとは考えていません。大陸、中でも朝鮮半島から水田稲作の技術とともに入って来ていると考えております。そうしますと弥生文化の中に、在来の縄文からの伝統を引き継ぐものの他に、大陸から伝わって来たものがある。それからもう一つ、縄文にも無く大陸にも無く、弥生時代になって初めて発達するものです。そういう縄文伝統、大陸系統、そして弥生特有の発達の三つに分けて、弥生時代の習俗を見ていくことにします。

土偶 お手元に資料が配布してあります。図1をご覧ください。縄文時代を代表する祭りの道具は、土偶が最も代表なものです。図1の1から6までが西日本の縄文時代から弥生時代にかけての土偶の例です。土偶といいますと東北地方で発達した亀ヶ岡式のいわゆる遮光器土偶を連想しますが、西日本の同じ時代の土偶は非常に簡素な作りです。1の顔の表現は、口を丸く窪めて表現しているだけで、目鼻の表現はありません。しかし、乳房を表現して、女性であることをはっきり示しています。2の場合もそうです。3も口と耳の穴の表現はあるんですけれども、やはり目鼻の表現が無い。4は、珍しくも目と鼻の表現はありますが、今度は口の表現がありません。人の顔を非常にシンプルに表現するのが縄文時代の西日本の土偶です。次に5・6はちょっと見た目にはとても土偶には見えません。5の土偶は、頭の部分が欠損していますので復元しておきましたけれども、おそらく目も鼻も顔も表現していない、ただわずかに山状にして頭を表現しているものです。しかし、この資料でも丸い小さな突出部を作っており、乳房の表現があります。そしてその下に穴が開いています。乳房が二つ付いてその下に円形の穴が二つ並んでいます。円形の穴の意味については次の資料で見ます。6は、乳房の表現がありません。そして二つの穴がやはり開けてあります。頭の表現もかなりいいかげんなもので、おそらく鼻と口を合わせたようなものを、带状に表現しています。はっきりとした顔の表現ではありません。5と6の2点の土偶で特徴的な身体の左右に開いている穴は、元をたどっていきますと、腕を腰にあてている状態の表現です。この一点だけを見てもそう見えませんが、ここに至るまでの過程はいくつかの材料で辿ることができます。5、6は弥生時代の初めごろの土偶です。そして間もなく土偶は消滅します。

土偶についてはいろいろ議論がなされています。性格のつかみどころが非常に少ない資料です。たくさん出てくるにもかかわらず、何に使われたかというとなかなかいい答えがでてこないというのが実情です。しかし、土偶の99.9%までは明らかに女性を表現しています。その点を重視するならば、女性は子供を産むという能力をもっていますし、古い時代はどうも女性を中心にして、女性の血の繋がりで系譜を辿っていたように思える部分があります。そうしますと、土偶は女系の祖先との関わりを示しているのかも知れません。縄文時代には女性を表現した土偶が非常に発達するのに対して、弥生時代になると無くなります。東北地方

でも、縄文時代の終わりごろ、亀ヶ岡式の時期にあれほど立派な土偶を作っていたのに、弥生時代になるとほとんどなくなってしまいます。どうして東北地方の縄文人は、弥生時代になっても古墳時代になっても土偶を作って頑張ってくれないのかという気持ちがしますけれども、西日本と同じように消えていきます。これは大きな特徴です。

石棒 土偶が女性を表現した代表的なものであるとすると、男性を表現した縄文時代の代表的なものは石棒です。図1の9が石棒、7は剣の形をしているので石剣と呼ばれています。8は片側に鈍い刃を持っているので石刀と呼ばれています。断面が丸く先が尖っていない、これが石棒と呼んでいるものです。石棒は、男性の性器を表現しており、男性のシンボルであろうというのが大方の一致した意見です。縄文時代の遺跡を発掘しますとたくさん出てくるんですけども、さて何に使ったかというとなかなかその使い方が解りません。大阪市の長原遺跡で知られている資料では、地面にあけた穴の中から石棒が出てきました。この場合は、地面に穴をあけて石棒を立てているのでしょう。それから、千葉市の内野第一遺跡では、長さ50cmほどの石棒が地面に突き立った状態で見つかりました。その石棒は縦方向にたくさんの亀裂が入っており、頭の部分には敲いた痕跡がはっきりのこっています。地面に石棒をあてて上からハンマーで敲き込んでいったのです。地面に石棒を立てるという行為は、男性の象徴を誇示する、強く示すことです。

こういう男性の象徴が発見されますと、すぐ女性との結合というものを考えるわけですけども、民俗学の千葉徳爾さんは現在の民俗例をあれこれ調べて、そういうことじゃないんだと述べています。大きくなった男性のシンボルは活力の源泉で、若さの証拠である。かつて狩猟民の間では山に狩猟に行く時に、男性のシンボルを露出して山の神に見せていたといえます。それは狩人の勇気を示すための象徴的な行為だといわれています。漁撈活動を行う前に、男性が自らのシンボルを見せるばあいもあります。原始時代の例えばシベリアの岩壁画を見ますと、狩猟している光景で、男性は自分のシンボルを立てています。千葉さんの説を要約しますと、男性の象徴を示すことは、ただちに生殖とか女性との結合を意味するものではない、ということです。ですからこの石棒も同じように男性の象徴であり、活力の象徴であって、それは豊猟につながるのである。石棒イコール豊猟という図式を描くと、石棒はまさに縄文的な祭り、狩猟儀礼に関わる石器であるということになります。

男根形木製品 その一方、弥生時代になると、石棒はさらに写実的なものになって登場します。図1の10～12は石で作った男性の象徴です。13は図をお見せするのも恥ずかしくなるような非常にリアルな表現です。これは木を削って作ってあります。14も木で作ったものです。縄文時代の石棒に比べるとはるかに写実的です。これだけリアルなものが出てきますので、女性を表現したものはないのかと探して見ましたが、私が知っている限りでは弥生時代ではまだ1例出ているだけです。こうして見ますと、どうも男性の象徴と女性の象徴をセットにして使うような考え方、あるいは儀礼は確認できません。男性の象徴だけを独立して使っていた可能性が強い。では、稲作が本格的に行われるようになった弥生時代における男性の象徴の意味は何かということです。これについては、平安時代の『古語拾遺』という文献に出てくる話が非常に示唆的です。『古語拾遺』には、神様の怒りによって稲の苗が枯れてしまう、そこで男性の象徴を木で作って水田の水口に立てておいた、そうしたら枯れていた苗がまた元に戻ったとあります。この場合は大きくなった男性の象徴が、元気を失ったもの、死んだものを蘇生させる呪的な力を持っているということで描かれています。ここには女性は出てきません。元気な男性の象徴が、元気を失ったものを元気づける、これは民俗学では類感呪術といえます。長崎県の里田原遺跡では木で作った大きな男性の象徴を、水田のところに立てていたものが発掘されています。こうして見ますと、『古語拾遺』に出てくるような儀礼が弥生時代にもあり、

そういう場で男性の象徴が使われたのではないかと推定されます。

ホト隠し 女性の象徴についても紹介しましょう。図1の15は縄文時代の貝製品、16は弥生時代の木製品です。15・16を見てすぐこれが何かは分かりにくいと思いますが、これは女性の陰部を隠すためのものです。長崎県浜郷の弥生遺跡で、埋葬されていた子供の陰部からこれが見つかりました。そこで、三角形あるいは逆台形の二カ所に穴を開けて紐を通すようにした貝殻、骨、木で作ったこういう製品は、女性が陰部を隠す道具であることが分かります。私はこれを「ホト隠し」の名称で呼んでいます。おそらく紐を通して腰に付けるわけですが、これだけでは固定できません。身体を動かすとこれも動いてしまって、隠すべきものが露出してしまいます。これはどうも実用のもとは思えない。祭りの時に女性がこれを着けるのではないか。その証拠は、17の奈良県の弥生土器に描いてある女性の司祭者です。この絵では逆三角形の線を描いて、そこに木の葉形で性器を表現してあります。実際には性器は表からは見えません。これは原始絵画における一つの表現方法であって、レントゲン画法とかX線スタイルと呼ばれているもので、本当は見えないんですけれども、その奥のあるものをあたかも見えるかのように描いています。動物の絵を描くときに、動物の輪郭を描いた後で心臓の部分にハート形を描くのと同じです。この女性の司祭者、巫女は服－褌衣（おすい）－を着ているのでしょう。褌衣の先端は三角になっていて、陰部を隠しているはずですが、ところがこの絵ではあたかも見えているかのようです。こういう話をしますと、皆さん方の中には古事記の中にでてくる、天宇受売命が天照大神を呼び出す時に裸になって踊ったという話を思い出される方もいるかと思いますが、15～17の資料は祭りの時に、女性が陰部をチラチラと見せる所作をしたことを示唆するものです。これと稲作との関係でありますけれども、16の福岡市の板付遺跡の例は、水田の水口のあたりから出ています。これは木で作って、表面を赤く塗っています。水田での祭りに使った可能性が強いと言える資料です。『古語拾遺』の記事を参考にすると、枯れそうになった稲を元気づけるために女性が陰部を見せるという呪術も、弥生時代にあったのでしょうか。ただこのホト隠しは縄文時代にも弥生時代にもありますから、縄文文化の伝統を引くものです。縄文から弥生に移るところに、使い方が変わったと考えることもできます。

抜歯 ここで話題を変えて、抜歯の話をしします。図2をご覧ください。抜歯の風習は古今東西にありますけれども、日本列島の縄文時代の終わり頃が世界で最も盛んな地域と時期です。これまで見つかった例では、最多14本を一人が抜いています。合計32本ある永久歯のうち、14本です。抜歯するのは、奥歯ではなく前歯、1番奥の部分でも第1小臼歯で、犬歯、切歯を抜くわけですから、食べるのに苦労したことでしょう。その縄文時代晩期の抜歯の風習を見ますと、大きく二つの抜き方があります。上顎の左右の犬歯を2本抜きます。その後、下顎の左右の犬歯を2本抜く。もう一つは、上顎の犬歯を2本抜いた後、下顎の切歯を4本抜くやり方です。調べて見ますと、この二つの歯の抜き方は、西日本の全ての遺跡にあります。2本の犬歯をタイプ、下顎の4本の切歯を抜く型式ということで、私は2C型、4I型と呼んでいます。この二つの抜き方をした人骨は、たいていの遺跡で1対1の割合で出てきます。4I型が50人いるとすると、2C型はやはり50人います。いろいろ調べて得た結論だけを申しますと、4I型はその土地の出身者です。結婚してもその土地に残る人がこういう抜き方をします。それに対して2C型は結婚して他所の村から入ってきた人に対する抜き方です。二つの歯の抜き方は、血縁関係の有無を基準にしての抜き分けです。縄文時代の人々は、おそらく血縁関係にある人達が大きな顔をして、他所から婚姻を機会にして入ってきた人達は、生きてるうちは、あの嫁はよそ者だとか、あるいはあの婿はよそ者だと言って区別、差別し、亡くなると埋める場所を違えているのです。結婚した機会に他所から入ってくる人を差別する、これが日本列島で一番古い差別のように思います。これはおかしいことです。結婚というと必ず他所から人を迎えなければいけない。

その人は自分たちとは最初は血縁関係が無いので、よそ者として区別する。そして子供ができて初めて、入ってきた人と受け入れた側との間に、子供を介して血縁関係が生じる。しかし、間接的な血縁関係は正式には認めない、やはりよそ者扱いする。生まれた子供は血縁関係があると認めてくれるけれども、産んだ女性、あるいは他所からやって来た男性は依然としてよそ者として、差別しつづけていました。抜歯の機能としてよく挙げられてきたのは成人式でした。しかし、縄文時代の成人式の時に抜く歯は、上顎の2本の犬歯だけであって、結婚するに際してまた歯を抜き加えていき、それには差別の意味もこめられていたのです。

ところが、弥生時代になると抜く歯が変わってきます。下顎の歯を抜くことは極めて稀になります。そして上顎の歯を抜く時は犬歯も抜く場合もありますけれども、それよりもう一本内側の側切歯を左右抜くことが盛んになります。この側切歯を抜く型式は、日本列島で迎えることができません。そこで大陸側を見ていきますと、中国の歯の抜き方がこの抜き方です。中国では一貫して上顎の左右の側切歯あるいは片側の側切歯を抜いています。としますと、弥生時代前期の歯の抜き方には、大陸から伝来した型式があることになります。抜歯の風習としては縄文、弥生は連続していますけれども、抜く歯が変わってきています。それから結婚式の時に歯を抜くという風習も衰退していきます。そして、弥生時代の中頃になりますと抜歯の風習もほぼ消えてしまいます。

鳥 西日本の弥生時代の祭りを代表するものは、鳥に対する信仰、儀礼です。図3をご覧ください。縄文時代に鳥に対する信仰があったという証拠ははっきりしません。それに対して弥生時代になると木を削って鳥の形を作ります。代表的なものを1に示しておきました。長さが20cmほどのもので、少し抽象化して表現しておりますのでこれだけを見て何の鳥ということを断定するのは難しいのですが、頸の長い鳥です。幸いなことに、弥生時代には銅鐸や土器に鳥の絵をしばしば描いています。3は、神戸市神岡から見つかった銅鐸に描いてある鳥の絵です。長い頸、長い脚、そして長い嘴をもっています。この鳥は鶴、鷺の類いです。私は、実はこの鳥の種類を何にするかということで長い間で悩んでいました。鶴も鷺も似たようなものではないかということになりますけれども、私はひじょうにこだわったのです。といいますのは、後の神話、伝説に出てくる鳥は、ほとんどが鶴です。鶴が恩返しをするという話はたくさんあります。それから、鶴が人間の世界に稲をもたらしたという神話もたくさんあります。これは沖縄にもあります。鶴が稲の穂を運んで来て、そこで人間が稲作を始めたという神話です。そうすると鶴であったほうがうまく説明がつく。そこで私は一時期、これは鶴であろうと考えていました。

ところが、鶴であるか鷺であるかを決める手掛かりがはっきりこの絵の中に描いてあったんです。この鳥は口に魚をくわえています。この魚は何の魚か、これだけの絵であります、実はその魚の種類をほぼ決めることができるのです。銅鐸に描いている水棲の動物はいずれも淡水性です。湖、沼、湿地に住んでいる動物が大部分です。海に住む動物は全く描いていません。とすると、この魚の絵も淡水魚ということになります。川とか湿地にいる魚です。この魚は背が高いのが特徴です。淡水魚でこんなに背の高い魚は、鯉または鮒です。この鳥が口にくわえているのは鯉または鮒ということになりますと、この鳥の種類を限定することができます。鶴は現在でも、大陸から渡来します。大陸の寒い冬を避けて、日本列島に飛んで来るわけです。ですから、鶴は秋に日本列島に飛んで来て春になると大陸に帰って行きます。鯉や鮒の生態を調べて見ますと、寒い冬の時期は深い所に潜っているのです。そして春から夏までの暖かい、水温が上がった季節に水面近くに浮き上がってくるのです。ですから秋に飛んで来た鶴は、鯉や鮒の類いを食べることはできません。その一方、鷺は現在、小川とか水田で見かけます。弥生時代の人々が水田を開いて、春に水を入れます。そうすると水に混じってまず最初に魚が入ってくるんです。鯉とか鮒の稚魚が入ってくる。あるいはおたまじ

ゃくしが入ってくる、そして蛙に成長していく、そういう小さな動物を食べるために鷺が飛んで来るのです。そして水田の辺りにたえずいます。ということで、銅鐸に描いてある頸の長い、脚の長い鳥は鶴ではなく、鷺であるということになります。そうすると木を削って作った鳥形もおそらく鷺を表現しているのでしょう。弥生時代の人々は鷺を信仰の対象にしていたのです。水田を開いて、水を引くとそこへ鷺が飛んできます。そしてそこに苗を植えます。その後、苗は順調に成長して秋になると実ります。その間、水田にいるのが白い神々しい姿をした鷺なのです。白い鷺、水田、稲が常に一体のものとして存在するわけです。鷺は稲と共にあり、あるいは逆に稲は鷺と共にあり、こうして稲と鷺がだんだん同じものに見えてきます。鷺は稲のシンボルと見なすようになります。鷺を祭ることは稲を祭ることと同じで、水田稲作を始めた弥生時代には鷺が信仰の対象になりました。

この信仰は日本列島で独自に始まったのでしょうか、それとも大陸から入ってきたのでしょうか。鳥に対する信仰は大陸側にも広く広がっており、農耕と結び付けた信仰も確認されています。また、鳥は天界と地上とを繋ぐ存在として理解されています。死者がでますと、その魂を天に運んでいくのも鳥の役割です。木の鳥は、韓国の新昌洞遺跡で頭の部分が見つっています。図3の2がそれです。頸、胴部とも別々に作って、組み合わせる形式です。現在でも似たようなものを長い棒の先につけて、村境に立てています。よそから邪悪なものが侵入してくるのを見張っているのです。韓国でも鷺の姿は見かけますが、木の鳥の種類は鷺ではありません。青銅器に表した鳥も鷺ではなく、もっと小さな鳥です。そういう点では鷺に対する信仰は、弥生時代に独特に発達したものかもしれません。

鹿 次に見ていきたいのは鹿に対する信仰です。図3の4は土器、5は銅鐸に鹿の絵を描いている例です。銅鐸の絵画については、小林行雄さんの説があります。銅鐸に鹿狩りや猪狩りの絵が描いてあります。それからトンボやカマキリなど昆虫の絵が描いてある。あるいは人の絵が描いてある。人の絵の中には脱穀している絵があります。それから高床の倉庫の絵もあります。そうした銅鐸の絵を見て小林さんは、銅鐸の絵には弱肉強食の世界が描かれていると解釈された。例えば、昆虫の中にきれいな蝶々の類が見えない。カマキリやクモを描いてある。あるいはトンボが描いてある。そして魚を食べる鷺が描いてある。こうしてみると皆肉食の動物ではないか。それから人が鹿狩りや猪狩りをしている絵が描いてあるけれども、これも人を肉食の動物とみて描いている。そうした絵の最後の部分に脱穀の絵、収穫した米を蓄える高床の倉庫の絵を描いている。そこで小林さんはこう解釈されました。動物は全て弱肉強食によって成り立っている。そして自分たちの祖先も、他の動物たちと同じように鹿を捕らえ、猪を殺して生きてきた。しかし、稲作を始め米を食べるようになってから、そういう弱肉強食の世界から離れ、生活も非常に安定するようになってきた。そこでこういう絵を描いた銅鐸を使って、自分たちの祖先を称えるために祭りをした。これが小林先生の説です。稲作を始めるようになった時代に、過去の時代、縄文時代を回想して、鹿の絵をたくさん描いていると説明したのです。

私もこの点に関心を持って、弥生時代の人々はどの程度鹿を捕って食べていたのか、縄文時代と比較してみました。縄文時代に鹿、猪をどのくらい食べていたのかは、骨の数によって調べます。具体的には鹿の下顎が1個出てくるとそこに鹿1頭を考えるわけです。そういう方法で鹿、猪の個体数をだしてみると、縄文時代はだいたい1対1の割合で鹿、猪を狩猟しています。ところが弥生時代になりますと鹿の量は非常に減ってしまいます。弥生時代の遺跡を掘っても鹿の骨が出てきません。出てもわずかにばかりです。鹿狩りは弥生時代になると明らかに衰退しています。では鹿狩りのかわりに猪狩りを盛んにやっているのかということ、最近の研究では弥生時代の猪とよんでいたものの多くは、実は家畜としての豚であることが分かってしまし

た。私の同僚の西本さんがその方面の専門家です。私も彼に猪と豚の骨の見分け方をあれこれ教わり、あちこちの遺跡のものを見ましたけれども、弥生時代の猪が仮に10頭いるとしますと、その内の7頭までは豚です。野生の猪は2～3の割合でしかいない。だから弥生時代は、稲作と豚飼育の時代です。稲と豚がいれば弥生時代の最先端をいく生業だと思います。ということで弥生時代になると一般に狩猟は活発ではありません。としますと、銅鐸に描いてある鹿狩りの絵は、一種の絵空事ということになります。実態としては鹿狩りはあまりやっていない。これは鹿にまつわる一種の神話を描いているのではないのでしょうか。よく見ますと5の銅鐸の絵では、狩人が鹿を捕らえている。その前に彼は矢を放ってこの鹿を倒しているはずですが、にもかかわらずここに描いてある絵では、鹿はちゃんと四つ足で立っています。そしてこの狩人は片手を軽く角に掛けていただけなのに、鹿はじっとしています。きっとこの狩人と鹿は何か対話しているのです。そうしますと『豊後国風土記』の記事を思い起こします。こういう話です。鹿が毎年のように水田の中に入って、植えてある稲を食べてしまう。そこで農民が怒って鹿を捕まえたところ、鹿は二度と水田を荒らすようなことはいたしません、どうか命だけはご勘弁をとということをいったというのです。そこで農民はその鹿を哀れに思って放してやった。そうしたら翌年から鹿は水田を荒らすことがなかった。のみならずその水田ではよく米が穫れるようになったと、私にはそういうことを描いているように思えます。鹿に狩人が何か語りかけている。これは実際の鹿狩りではなくて、鹿狩りの神事つまり祭りの情景を表現しているのではないのでしょうか。銅鐸や土器にいろんな絵が描いてありますけれども、その中で飛び抜けて多いのが鹿の絵です。弥生時代は稲作の時代ですが、稲を具体的に描いた絵は一つもありません。弥生人が描くのは鹿であり、鷺であり、狩人でした。

どうして弥生時代の人々は鹿の絵をたくさん土器や銅鐸に描いたのか。鹿で一番特徴的なことは、角をはやしていることです。皆さん方に鹿の絵を描いていただくと、十人の内十人まで角をはやした鹿の絵を描くと思います。ここに示している二つの図でも、角の表現があります。ところが銅鐸の鹿は角を描かないのが普通なのです。例外をここに示したのはちょっとまずかったのですけれども、私はこの5の神岡5号銅鐸の鹿の角は間違っているとします。と言いますのは同じ作者が、この後、銅鐸を三つ連続して作っているのです。どれにも同じような絵が描いてあります。調べていきますとその四つの銅鐸を作った順番がわかります。それに従って鹿の絵を見ていきますと、一番最初に作った銅鐸の鹿の絵にだけ角の表現があります。そして二つ目、三つ目、四つ目の鹿には角の表現が無いんです。それ以外の銅鐸の鹿の絵にも角の表現がありません。弥生時代の人々は、鹿の角に特別な関心を持っているのです。特別な思い入れがあるんです。

そこで鹿の角の生態について注意して見ますと、鹿の角は1年を通して生えているわけではありません。春に生え始めて秋になりますと立派になります。そして冬を越して次の年の春に落ちるんですね。必ず1年単位で落ちるわけです。落ちては生え、落ちては生えということを繰り返しています。これが大事です。これに最もよく似ているのが、稲です。鹿の角と同じように、春に生え始めて秋に立派に成長します。ですから鹿の身体は水田あるいは土地に相当し、そこから生えてくる角は稲に対応します。

『播磨国風土記』を見ますと、この中に男と女の神様が土地の取り合いをするという神話がでています。男女の神様の争う方法がすごくおもしろい。稲の籾から苗が出てくるまでのスピードを競うのです。男の神様は、ごく当たり前に水田に籾を撒いたんです。ところが女の神様は、生きている鹿の腹を割いてその中に稲の籾を撒いたといいます。そしたら一晩にして女の神様の方は苗ができてしまう。男の場合は何も変化が無い。そこで女の神様が勝って、男の神様がその土地を去ります。生きている鹿の腹を割いて、その血の中に稲の籾をまいたところたった一晩で苗ができたということは、鹿の身体、鹿の血液がいかに生命力に満ち

溢れているかということです。それが故に、数カ月間の間にあれだけ立派な角になるわけです。同じ『播磨国風土記』に、鹿の血を水田に撒くという記事があります。このように、昔の人の気持ちは、鹿の生命力にあやかりたい、あの角のようにすくすくと稲に成長して欲しいということでした。鹿の角を稲に例えると、鹿の身体は土地、水田です。おそらく弥生時代の人々は鹿を土地のシンボル、土地の精霊であると見なしていました。そうであればとても神様としての鹿を捕らえて食べるということができなくなります。鹿は信仰の対象になります。

ただ弥生時代の人も時にはやはり鹿、鹿の骨が必要な時があります。占いに鹿の肩の骨を利用いたします。図4をごらんください。1は豚の肩甲骨です。2は鹿の肩甲骨で、占いに使ったことがはっきりしているものです。焼いた木の箸をこの肩の骨の薄い部分に押し当てて焼きます。そうすると亀裂が生じますので、その具合によっていろんな占い事をする。この骨占いには鹿の骨が必要になります。弥生時代の人々も時として祭りのために、やはり鹿に死んでもらわなければいけないということになります。ですから、鹿の肉を久しぶりに食べたいという動機で鹿狩りをやるのではなくて、おそらく祭りの季節、おそらく春、角がまだ生えていない時期に、鹿を捕らえてお祭りをする。その後、鹿を解体してその肩甲骨を抜き取りますが、その骨は、脂を非常に含んでいますので、すぐには使えません。さらしておく期間が必要です。おそらく春に鹿を捕らえて、肩の骨を抜いてそれを保存して、次の祭りの時に使ったのでしょう。

木偶 銅鐸の絵画には、鷺や鹿のほかに、人の絵があります。狩人、脱穀する人、争っている人などの姿をとっています。時には大きな船に人が乗って、オールを持って漕いでいる状態を描いています。銅鐸に描いてある人に相当する木製品、木を削って作ったものが図3の6、7、8の例です。木偶、あるいは人形の木製品とも呼んでいます。6、7は男か女かの判断が全くつきません。しかし、8は腰部に穴を開けて小さな棒を通して男であることをはっきり示しています。7、8は同じ遺跡のすぐ近くから出てきましたので、これをセットであると考えたと7は女、8は男ということになります。男は大きく作り、女は小さく作っています。縄文時代の土偶は女だけですから、弥生時代になってはじめて男、女を表現するようになる。そしてその場合は女を小さく、男を大きく作っている。縄文から弥生への移行の間に男女の関係が逆転し、女性優位の時代から男性優位の時代へ移っていったことが、こういう木偶の大きさから想像することができます。

模擬戦 弥生時代に特別に発達した祭りとしても一つ挙げておきたいのは、模擬戦です。図5に木で作った剣を示しています。これは木を削って剣の形を作ったものです。1、2はさらに柄を付けることが必要です。それに対して3は銅で作った剣に柄を付けている状態を木で表現しています。おそらくこれは実用品ではありません。実際に人を殺傷するための剣ではありません。ところが中には、この木で作った剣で先端が擦って使った痕跡が残っているものがあります。それが模擬戦と言われているものです。本当の戦いではなくて、戦いのいわば真似事です。

昨夜、秋田県埋蔵文化財センター所長の富樫泰時さんからお聞きした話です。秋田県の綱引き行事は、男綱と女綱を前以て用意しておき、それを結合して双方から引き合う非常に盛大なもので、春に行く。その話を聞いた時、その起源は歳占いだと思ったんです。季節は春、そして男性と女性に分かれて、男綱と女綱に分かれて、引っ張り合う。その年の豊作あるいは不作を占う歳占いの行事があるんです。こういう歳占いは、最初から勝つ方が決まっています。豊作と凶作とが分かれて戦いますが、人間の側からすると豊作のほうが常に勝って欲しい。例えば女綱の側が勝てば豊作、男綱の方が勝てば凶作と最初に決めておいた場合、絶対、女綱が勝ってくれないと困る。だから本来の綱引きは八百長になります。勝つ方が最初から決まっているの

ですから。

それから相撲も元はそういう歳占い、お祭りの要素がありました。相撲の場合もやはりこちらが勝ったら豊作、あちらが勝ったら凶作ということになっています。だから必ず勝つ人を決めています。八百長相撲というのがありますけれども、いや相撲には本来そういう性格があった、ということになります。勝負にこだわるようになったのは後の話です。

この模擬戦を考えさせる材料も、わずかに残っているだけです。木で作った武器の形をした道具と銅鐸の中に、二人の人物が戦っている絵があります。戦いの絵では、大きな背の高い人と背の低い人が武器をもって格闘している。そして背の高い方が優位であるような描き方をしています。これも現実の戦いを描いているのではなく、模擬戦を描いているのかもしれませんが。背の高い人が勝ちそうになっている、こちらが勝って背の低い人が負ければ豊作、その逆になると凶作、しかしそれは困るという気持ちを大小の人物は表現しているのでしょう。

魔除け 最後の一つだけ大陸系の呪術を紹介しておきます。図6は豚または猪の下顎骨に孔を開けて、その孔に棒または紐を通してどこかに掛けておく風習です。これは弥生時代に西日本に現れます。だいたい九州から東海地方までこの例があります。佐賀県菜畑の例では、豚の下顎骨に棒を通した状態で遺跡から見つかっています。つい最近岡山市南方からも十数点の下顎がきれいに並んで出てきました。棒が残っていないんですけど、全て孔があいています。豚の下顎骨を掛けておく風習は中国では、新石器時代以来あります。中国では家の壁に、豚の下顎を掛けておく。それから台湾に行きますと、猪の下顎を棒に通してかけています。私は数年前に奄美大島で同じような例を見ました。

中国ではそれについてこう説明しています。自分の家で飼っていた豚を殺して近所の人をみんな呼び集めて肉を気前よく配ってやった証拠に下顎を残しておく。門の上に下顎をずらっと並べているのも、自分は大勢の人に肉を奢ってやった自慢の種として残しているわけです。毎度、毎度奢ってもらっていると、その人に対して頭が上がらなくなります。こうして大盤振る舞いした人は周りの人との優劣の関係を示すシンボルとして豚の下顎骨を残します。それから、台湾の場合は豚ではなく猪です。倒した人に聞きますと、自分はこんなにたくさん猪を殺したんだという腕自慢のための証拠物件として下顎を残すんだというのです。私が奄美大島で見た例もやはり同じでした。猟師が自分の腕を示すために、殺すたびに下顎だけは残しておくんだという話でした。

ところがもっともっと時代を溯っていくと、中国の古い記録の中に豚についての考えが出ています。それによると、豚の顔は非常に醜悪な顔で、しかも怖い顔をしているというのです。そこで魔物が近よってきた時に、豚の顔を見せて魔物を退散させる魔除けの動物として豚を考えている。とすると豚を殺した後その頭の骨、あるいは下顎の骨を残して、家の入り口におくとか、あるいは村の入り口におくと、魔物が近づいて来るのを防ぐことができます。人間にとって一番怖い魔物は、実は死んだ人の霊魂なのです。死者の霊魂が取り憑きますと、その人は亡くなります。ですから死霊が入ってくるのを防ぐために家の出入り口にこういうものをおいておく。あるいは、家の奥の部分に豚の死体を掛けておきます。中国では非常に早い時期、今から7～8,000年前からこういう魔除けの風習がありました。豚の下顎骨を、家の中に保存しておくとか、墓の中に入れるという風習は、中国で長い歴史をもち、弥生時代に日本列島に入ってきたのです。

こうしてみますと、弥生時代の風習は縄文時代に由来するものがあるほかに、大陸渡来のものがあります。それから鹿に対する信仰のように、どうも弥生時代に独自に発達したと思われる風習もあります。このような風習の最後の仕上げとでもいうものが銅鐸です。

銅鐸 図7の9が日本の銅鐸です。銅鐸は一番古いものが高さ20cmぐらい、小さなものから始まります。そして、高さが134cmまで達する巨大な銅鐸になった直後に消滅します。劇的な終わり方です。日本の銅鐸の特徴は、大きいこと、表面を文様でにぎやかに飾っていることです。

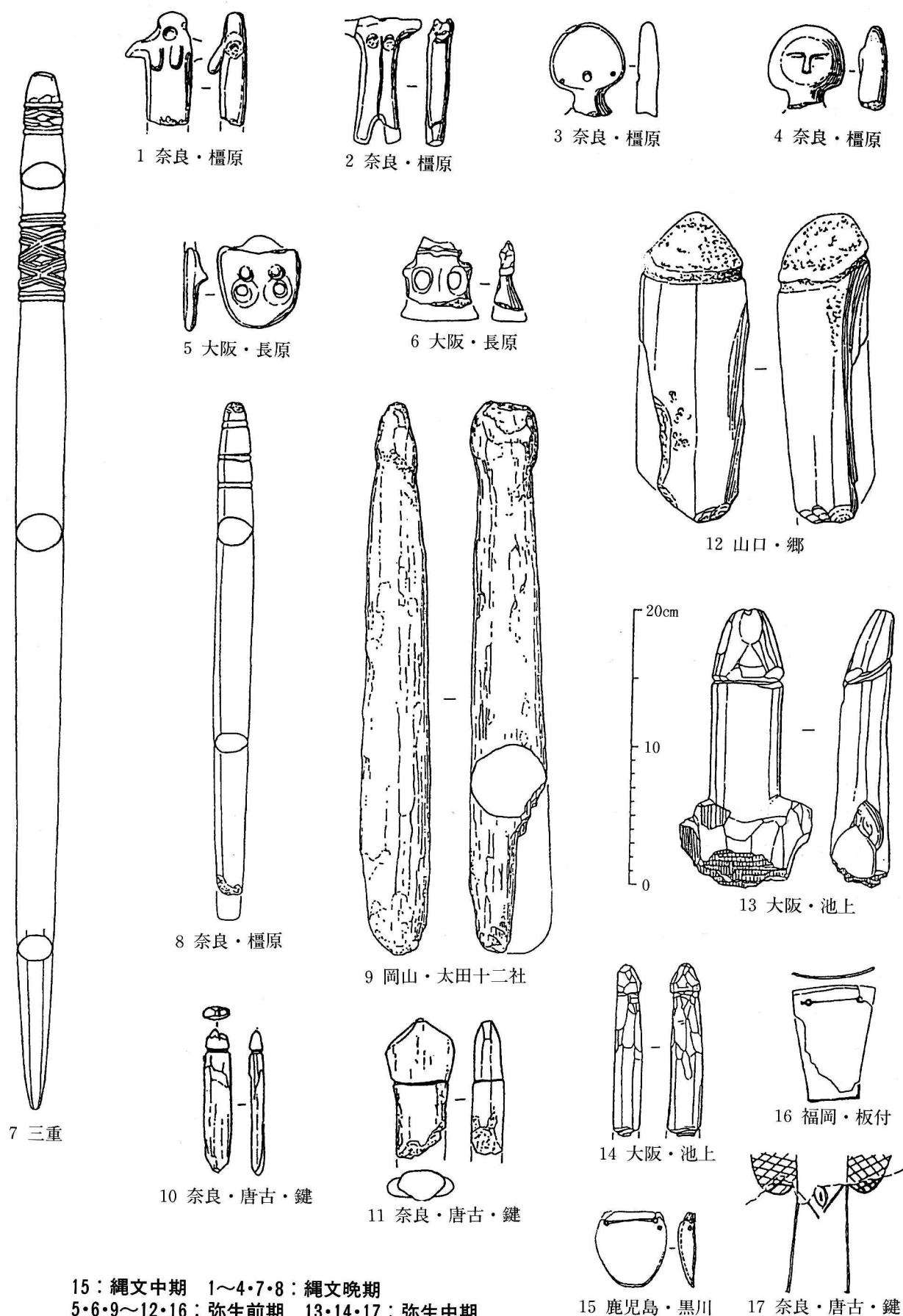
銅鐸の起源をたどっていきますと、一番最初は中国の新石器時代、6,000年ほど前に粘土で焼物として作った1の土鈴です。小さなものですが、これは銅で作ったものです。2は青銅ではなく、純銅で作った鈴です。3が青銅製品としてもっとも古い鈴です。中国の黄河流域でこういうものが発達して、その後中国の東北地方そして朝鮮半島を経由して日本列島に銅鈴、銅鐸が入って来るわけです。中国で最初に鈴を使った時は、たぶん、木の柄の先に鈴を付けて手で持って動かしました。そうでなければ腰に付けました。そうするとカランカランとかリンリンという音がします。金属の音を邪悪なものは嫌います。そこで悪霊を退けるために銅鈴が発達したのです。そして殷の時代になると、馬の頸、犬の頸にも鈴を付けます。これも魔除けです。馬が戦車を引く、戦車の上には人が乗っています。この戦車に立てた旗の裾にも鈴を付けたりします。また、死者が出ると棺に入れて埋めますけれども、棺の上に長方形の布（棺覆い）を、ちょうどテーブルクロスのようにかけます。その布の四隅に鈴を下げておくのです。これも悪霊が寄って来るのを防ぐためです。

そして紀元前3世紀ごろ、銅鈴が中国の東北地方から朝鮮半島に伝わります。朝鮮半島では鈴を2個または4個身体に付けます。付けた人は司祭者で、身体を揺すって踊ります。そうするとガラガラと音がでます。胸には銅で作った鏡を付けています。鈴が音を発し、鏡がキラキラ光ります。次第に司祭者は、精神状態がおかしくなって神の世界に入っていく、そして神の声を聞く。そして、正気にもどった時に村人に対して神の託宣を下すわけです。銅鈴は朝鮮海峡を越えて日本列島に伝わると、稲の祭りに使う銅鐸に変わります。日本の銅鐸はどんどん大きなものになり、身体につけるのではなくて大きな木などに下げて鳴らします。悪霊がやって来るのを退ける、やはり魔除けのためです。そして、銅鐸の音で神様を招きます。そして稲の豊作のお願い事をする。この時代の神は、鹿、鷲であり、そして自分達の祖先でした。そしてそれは取りも直さず土地の神、稲の神、そして祖先神でした。農耕を始めた弥生時代の人々にとって一番大事なものは、稲であり、稲を成長させる土地であり、そして現在の自分達の基礎を築いてくれた祖先であるという考えが最初からあったのです。

こうして見ますと、縄文時代から弥生時代への移行の間に、水田稲作の始まりをきっかけにして文化や風習の面で大きな変化が生じたということがはっきりと分かってきます。

本日は私は西日本だけに絞ってお話をしました。東日本あるいは東北地方で稲作を始めた時代、秋田県でも地蔵田遺跡その他弥生時代の古い時代の村の跡が分かってまいりましたが、彼らの風習はどうであったのか、稲作を始める前と後ではどう変わっているのか、これから地元の方々に追究していただきたい、そのように希望して、私の話を終わります。御静聴ありがとうございました。

（平成6年度秋田県埋蔵文化財発掘調査報告会、秋田会場にて）

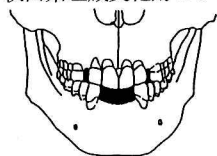


15：縄文中期 1～4・7・8：縄文晩期

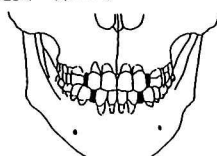
5・6・9～12・16：弥生前期 13・14・17：弥生中期

第1図 土偶(1～6)、石剣(7)、石刀(8)、石棒(9)、男根石製品(10～12)

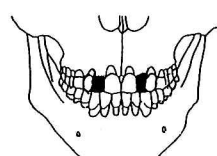
男根木製品(13・14)、木卜隠し(15貝製品、16木製品)、土器絵画(17)



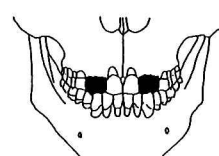
4I 型



2C 型



2I² 型

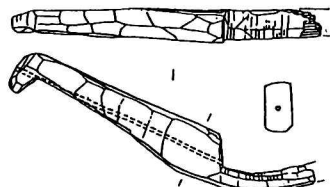


2I²C 型

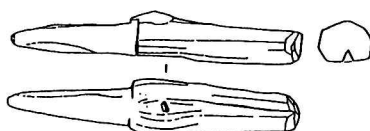
縄文系

渡来系

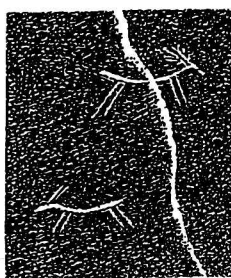
第2図 抜歯の変化(縄文系から大陸系へ)



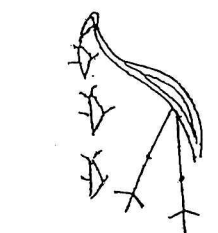
1 大阪・山賀



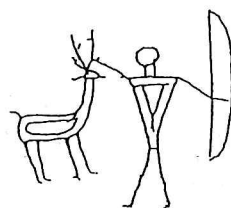
2 韓国・新昌洞



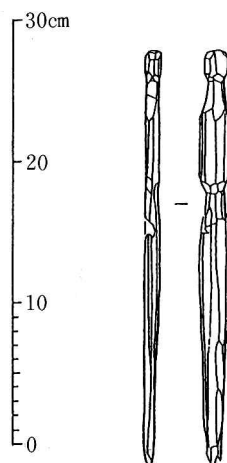
4 福岡・吉武高木



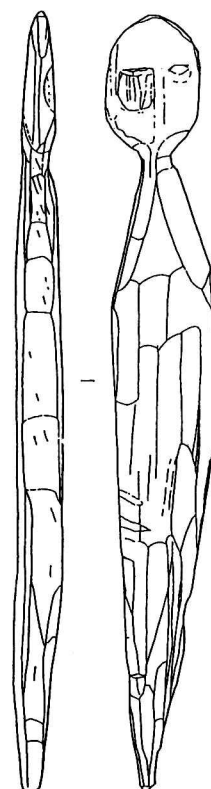
3 兵庫・神岡 4 号鐸



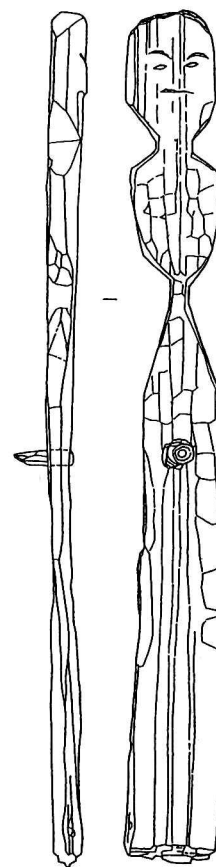
5 兵庫・神岡 5 号鐸



6 大阪・山賀



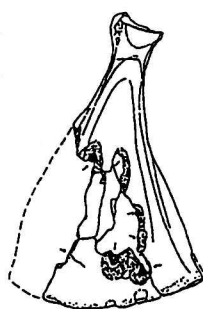
7 滋賀・湯ノ部



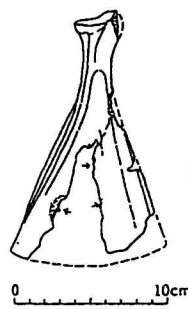
8 滋賀・湯ノ部

1~4・6: 弥生前期 3・5・7・8: 弥生中期

第3図 鳥形木製品(1・2)、銅鐸(3・5)、土器絵画(4)、人形木製品(6~8)



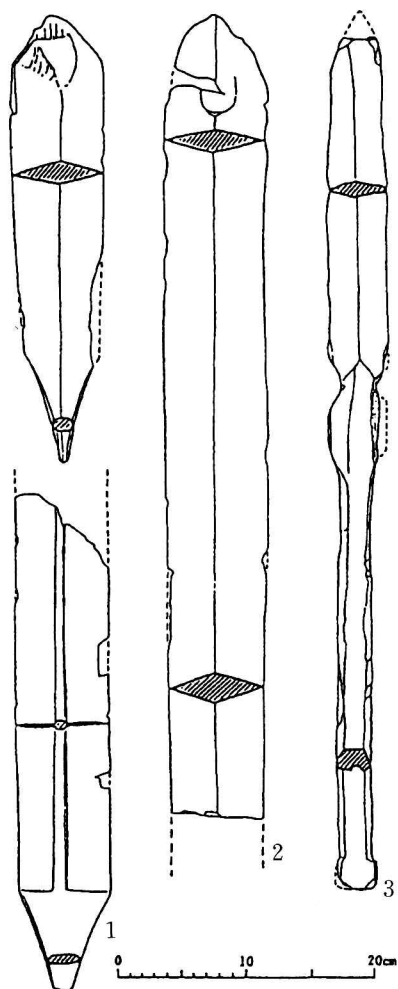
1 豚の肩の骨



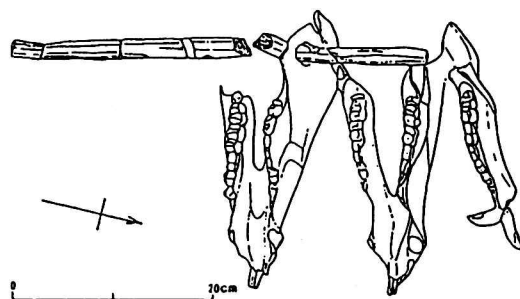
2 鹿の肩の骨

0 10cm

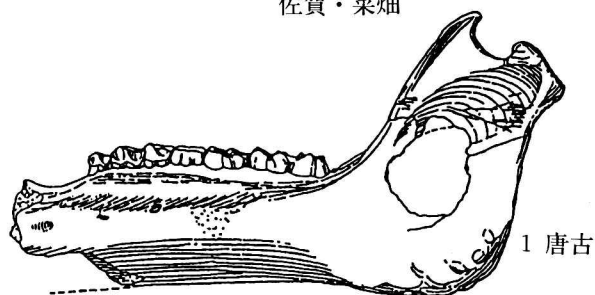
第4図 骨 占 い



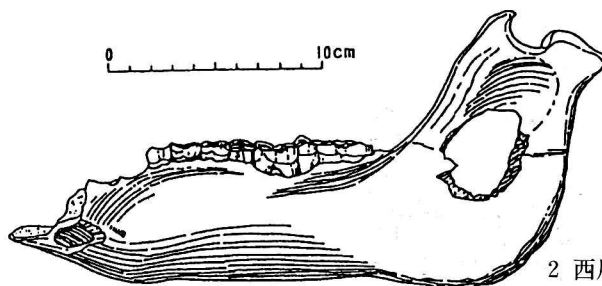
第5図 木で作った模擬戦用の剣



佐賀・菜畑

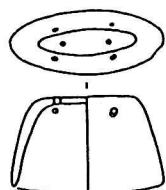


1 唐古



2 西川津

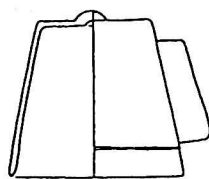
第6図 豚の下顎骨を棒に掛ける



1 河南・下王崗



2 山西・陶寺



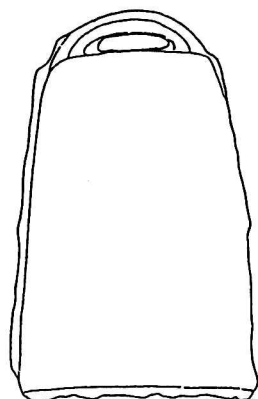
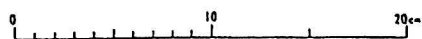
3 河南・二里頭



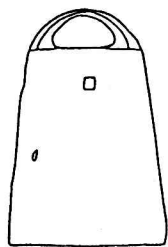
4 河南・殷墟



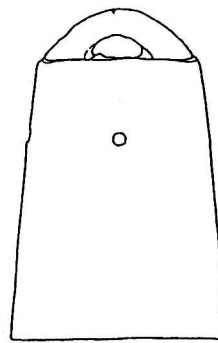
5 河南・老城



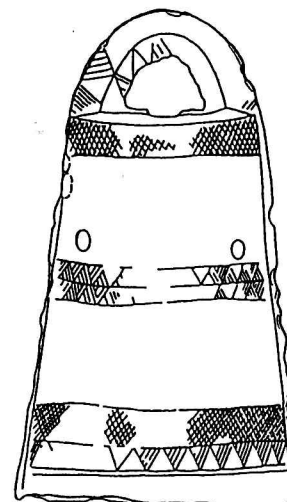
6 遼寧・三宮旬



7 大田・槐亭洞



8 扶余・合松里



9 兵庫・中川原

第7図 土鈴・銅鈴から銅鐸へ